

思い出調査を用いた人間発達と生活環境・まちづくりの関係性

The Relationship of Life-span Development to Town Design by Survey Memories

久保田 明子<sup>1</sup> 金 利昭<sup>2</sup> 横瀬 拓也<sup>3</sup>

Akiko KUBOTA, Toshiaki KIN, Takuya YOKOSE

1. はじめに

近年日本では、キレる子ども、いじめ、基礎体力の低下など、子どもの心身の不健全さが大きな社会問題となっている。しかしこのような心身の問題は子どもだけに限られたものではない。ひきこもりや残虐な青少年の犯罪、子育てをうまくできない母親、大人の社会モラルの欠如やストレス、生活習慣病や老人の痴呆症などすべての年齢に見られる。

このような人間の心身の問題を解決するためには、身近な地域やまちのあり方が重要であるということが社会の共通認識となってきた。さらにその場合、ソフトな人間関係だけでなく、それを支えるハードな地域・まちの構造自体に関係があるのではないかということが指摘されはじめています。

しかしながら、人間の成長・老化過程における自己の形成(人間発達)にとって、地域・まちの構造の「どこに問題があるのか」「何が問題なのか」「どうしたらよいか」という点に関して、既存研究は部分的(遊び場、環境教育、複合施設など)もしくは抽象的(自然体験が重要)研究がほとんどであり、議論の前提となる理論的な枠組はないと思われる。

そこで本研究では、人の思い出の中から過去の日常生活空間や、追憶によって生じた思考を調査することで、人間発達とまちづくり要素の関係性について整理をし、生活環境・まちづくり要素とその意味について考察を行う。

2. 研究の考え方

これまで都市空間デザインは青年期の身体尺度やライフスタイルを人間の標準として計画されてきた。

しかし、身体的発達度は青年期が最も高く<sup>1)</sup>(図1) 幼児期や高齢期などの弱者に対する配慮が少ないこれまでのデザインでは不都合が顕在化し、これに対して近年ユニバーサルデザインという考え方が広まっている。さらに都心部の過密さや、心を癒す自然が少ない環境は、精神的なストレスを与えており、身体尺度だけでなく精神尺度についても考慮する必要があると考えられる。

例えば青年期・中壮年期に注目した場合、身体尺度は徐々に低下しはじめるが、性格的な自己確認といった精神尺度はさらに充実していく段階であり、こうした人間発達を考慮せず、人のライフスタイルを軽視した空間デザインが現代のストレス社会の一因となっていると考えられる。

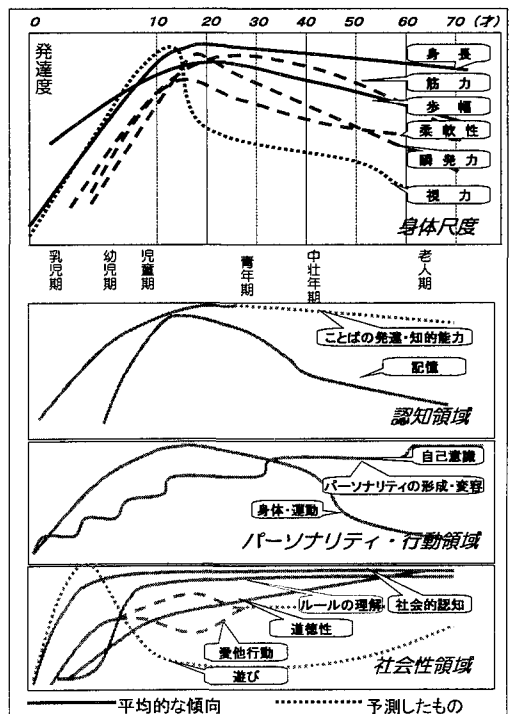


図1 身体尺度と精神尺度

Keywords 空間整備・設計、人間発達、思い出、意味論

1. 学生員 茨城大学大学院理工学研究科 都市システム工学専攻
2. 正員 工博、茨城大学工学部 都市システム工学科  
〒316-8511 茨城県日立市中成沢町 4-12-1 0294-38-5171
3. (株) 国際開発コンサルタンツ

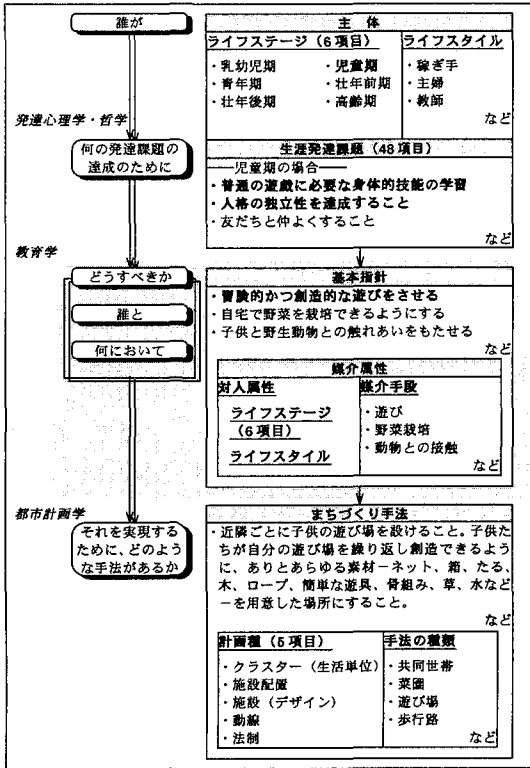


図2 人間発達とまちづくりの関係フレーム

著者らは、人間発達を考慮したまちづくりを進めるため、人間発達とまちづくりの基本関係フレームを作成し研究を進めてきた(図2)<sup>2)</sup>。乳幼児期から高齢者まですべてのライフステージにおける人間発達課題と発達を促すための指針より、具体的なまちづくり手法(空間デザインのハードと住民意思決定方法などのソフトの両面)を求めようと試みたものである。本研究は、この関係フレームの完成を目指している。

### 3. 思い出調査の方法

本研究では、日常生活空間と人間発達との関係性を求める手法として、思い出調査を行った。リントンの記憶テスト<sup>3)</sup>では、1、2年以上前の過去の出来事を思い出す手がかりは、物事の本質的な意味であると述べている。つまり「思い出」は、記憶の本当の関心事、自己の意味の創造へとつながっていくと考えられ、思い出からまちづくりを考察することは有効と考えられる。

#### (1) 大学生を対象としたアンケート

現在までの周辺環境の事実、また生まれてから今日までの記憶・体験についてや、それらの出来事から「何を感じたか」といった自分にとっての意味を

表2 植物の思い出シート

分類 (意味)	事例	ライフステージ別の数					要素 (何を、何で)	空間 (どこで)	人 (だれと)	感情 (どんな気持ち)
		幼 児 期	小 学 校	中 学 校	高 校	大 学				
四季を感じる	・春に庭のチューリップが咲くのが楽しかった	7	6	2	1	0	稲、里芋、ジャガイモの花、サクラ、チューリップ	田んぼ 畑 庭 学校		きれい、美しい 楽しみ 好き
遊びの手段	・オモナミを服にぶつけ合って遊んだ ・シロツメ草のみつをすって遊んだ	4	5	0	0	0	オモナミ、レンゲ、笹の葉、シロツメ草、クローバー	原っぱ 田んぼ 小川	友達	
体験・出来事	・庭に咲いた月下美人の花を見た ・ひまわりの花に届かなかった	3	4	1	0	0	月下美人、さつまいも畑、トマト、うるし、ひまわり	庭 畑 山	友達	うれしい くやしい
生命について考える	・朝顔の観察日記をつけ、生命力のようなものに感動した	1	4	0	0	0	朝顔、木	庭 校庭	友達	うれしい 感動した たのしい
存在	・近くにりんごの木がたくさんある ・クリやアケビの実がなった	6	7	2	0	0	りんご、クリ、アケビ、ツツジ、アジサイ、サクラ、シロツメ草、チューリップ、杉の木	庭 道端 近くの畑 山		
収穫・食べる	・祖母の作ったトマト、きゅうりなどが食事に出る	6	6	4	2	1	イチゴ、スイカ、さつまいも、ナス、ダイコン、じゃがいも、にんじん、アスパラガス、里芋、ナシ、巨峰、天然キノコ、タケノコ	畑 裏のビニールハウス 庭、山	祖父母、父	

自由記述で回答してもらった(表1)。その際、人間発達の影響要因となる自然、動物、植物、人工物、人間の5つのキーワード『5大影響要因』を与え、これに即して考えるように指定している。

表1 大学生アンケート調査概要

調査年月	平成10年7~8月
調査数	54
調査対象	茨城大学学生

記述回答のなかから、具体的な「まちづくり要素名(何を、何で)」「ライフステージ(いつ)」「その場所や空間(どこで)」「人(誰と)」「感情(どのような気持ち)」の5つの『関係因子』に相当する単語を、「生命について考える」「収穫・食べる」といった意味別に分類した。これを『5大影響要因』別に行い5つの「思い出シート」を作成した(このうち「植物の思い出シート」を例として表2に示す)。

(2) 自伝文学作品

ここでは表3に示す2点の文学作品の読み解き<sup>4)</sup>を行い、さらに詳しい意味の部分を探り出す事を目

的としている。記述内容から、アンケート調査と同様に、関係因子や出来事の意味についても抜き出した。

表3 自伝小説の文献

著者名	作品名
①中村桂子	生命科学者ノート(2000年刊)
②東山魁夷	風景との対話(1967年刊)

ここでは、青年期に育児の喜びを感じている事や、中年期に、北欧を旅行し雄大な風景の中に身を置く事で、自己を振り返り精神的に安定したという記述もあった。この事からも空間デザインにおいては、特定のライフステージのみを対象とするのではなく、すべてのライフステージを通して検討することが必要であるといえる(表4、5)。

4.まとめと考察

(1) 人間発達とまちづくりの関係性

2つの調査結果を考察材料とすることで、人間発達とまちづくりの関係性を示す基礎的枠組を抽出した(図3)。

表4 自伝文学①より

ライフステージ	まちづくり要素	思い出
幼年期 小さい頃	日当たりの良い縁側 庭先に出された藤椅子 門の前の石段 路地、友達、薄闇	門の前の石段に座り込んで童話に読みふけていた。読んでいるうちに活字がぼやけてきたのでふと顔をあげると、あたりはもう薄暗くなっていた。さっきまで路で遊んでいた友達もいつの間にかいない。薄闇の中に一人取り残されたときの寂しさが今では懐かしい。
児童期 小学校3年生	山梨の疎開先、山村 家の客間、父の友人 柿	父の友人が遊びに来ていた。かごの中の柿が食べたかったが、人見知りが激しく黙っていた。(中略)大人と一緒に大笑いしながら一つの物を分け合っ て食べたということが自分を少し大きく思わせた。その時初めて、言葉というものに関心をもった。
児童期 小学校3年生	山梨の疎開先、山村 河原、冷たい川の水 空、友達	夏の朝、ラジオ体操のあと、山から流れてくる水に足をつけながら空をながめ、この先に東京があるのだと話し合った。こんな不自然な生活がいつまで続くのだろうかと不安だった。
青年期 大学院生時代	恩師	大学院時代の恩師の口癖が「実験が思い通りに行かなかったら喜びなさい」だった。自然の奥深さに比べたら、私の知識などまだまだほんのちいさなものだ。
青年期 結婚後すぐ	義父、台所	義父に頼まれたスライスオニオンが上手に作れなかった。この時の失敗で反省し、家事をなかなか頭のいい加減にできないものと考えようになった。
青年期 子供が ハイハイ歩き	縁側の端	子供がハイハイで縁側の端まで来た時に、首を少し外へ出して、地面をじつとながめたあと、くると後ろ向きになっており始めるのを見た。赤ん坊でも、自分の目で測って安全を確かめるものだと驚いた。
青年期 子供が 1歳2ヵ月	子供 窓の外の柿	庭の柿の木になったまだ青い小さな実を指して、はつきりとした発音で「カ・キ」と言った時、びっくりした。それまではママ、プウプウ、パイパイなどの赤ちゃん言葉ばかりだったのに、一つ一つの発音を確かめるようにはつきりと口を動かして、カキと言ひ、うれしそうにニコリしたからである。
青年期 子供が3歳	馬、牧場	絵本やテレビで観た馬が好きだったので、実物を見せに牧場に行った。イメージと実物とのギャップを埋めるのに時間を要した。実際の大きさを理解することの大切さを学んだ。
(最近)	高校生の娘	娘とけんかをした。手がかからなくなったが、人間としての親子関係はこれだから本格的だと思った。けっして楽にはならないだろう。

表5 自伝文学②より

ライフステージ	まちづくり要素	思い出	自分にとっての意味
少年期	須磨の海、波	大きな土用波に飲まれた。どうなることかと一瞬恐怖を感じたが、その強力な波の力に対し身をまかせていたら、思いがけず頭が波間に浮かび上がった。	現実の波の中で、生きていくしかない。私の置かれた立場で、私にできる最善をつくす。
少年期 美大生時代	京都、星をちりばめた空、天地をやわらかく包んでいる霧、砂利を踏む足音、友人	神戸の家に帰省するたび、よく遊びにいったものだ。京都の空気の持つ潤いは、心の中に生き続けているもの。年月を経て、私の中に蓄積したものが、はじめて、少年時代からの憧憬を満たしてくれる。	古都への慕情が私を熱中させている。
青年期 (戦中)	肥後平野、阿蘇の雄大な風景	戦中、死を身近にはつきりと意識した時、雄大な風景に感動した。それまでいろんな場所に旅をしたが、心を締めつけられる思いは初めてだった。	いろんな苦しみに耐え、生の輝きを私なりにつかむ事ができた。
青年期 (戦後)	佐賀から鹿野山までの道、冷々とした空気、広潤な眺望、静かな空、	3時間の山道で、私は長い回想の年月を辿ってきた。兄弟の若い死、両親の死、戦争、召集、留学などこれまでの人生を振り返った。充実したものを心に深く感じる。	この風景を描いた作品が世に認められるきっかけとなった。人生の岐路。
中年期	フィンランドへの旅行、白夜、白樺の丘、太陽と湖、森、古い街、壁…	日常の創作活動で疲れていた。取入れるよりも、作品として吐き出す方が多く、芸術的な歩みの中で、重要な意味を持つものだった。	目的は美しく、寂しい風景を見る事であったが、素朴な人間的な愛に触れ、清純な情感が生まれた

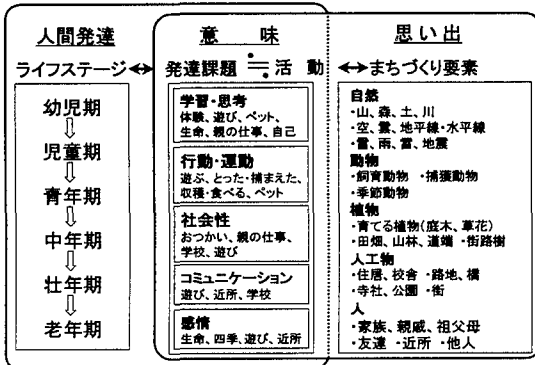


図3 生涯発達とまちづくりの関係性

(2) まちづくり要素とその意味

特に、印象深いと思われる記述から、一部ではあるが、まちづくり要素とその意味について考察した結果を次に示す。

①祖父母、飼育動物・育てる植物と生命・死

児童期から青少年期にかけて、ペットの世話をしたり、アサガオを育てることによって、生命力や命のたいせつさを学んでいる。また祖父母や親類の死を経験したことで、「老い」「死」を見つめるきっかけとなっていた。近年都心部ではマンション住まいや核家族化が進み、祖父母との同居や身近に生物を育てる経験ができにくい環境に変化してきており、子供が「命」を感じる環境は少なくなっている。

②収穫・食べる植物と生命維持環境の理解

幼児期に田畑や庭が日常生活環境にある場合、野菜や果物を収穫し食べたという記憶が多く、「生き

る力」の創造、自然界との一体感につながると考えられる。

③広大な空間と存在確認・自己同定

山が重なり合う、水平線が見える、頭上に広がる大きな空といった広大な空間のなかで、自分を客観的に見つめ直している。考えた事なども鮮明に記憶しており「人生の岐路」「人生観について考えるきっかけ」など、内面的な自己成長について振り返った人生の中で重要な場面であると考えられる。

④寺社・路地・公園(遊び場)

と子供の友達付き合い・文化化

遊び場は、路地や河原、土手、森林、寺社などでの遊び経験の方が「ルールをつくった」「工夫した」といった印象の強い思い出という記述が多く、創造力を育てると考えられる。

⑤他人・知人と子供の社会化・文化化

近所のおばさんや父の友人など、肉親ではない他人とのやりとりや掛け合いが、大人になった様でうれしかったという記述がある。自分が社会的な場に存在していることで自己の成長を自覚していた。

参考文献

- 1) 東洋、繁田進、田島信元：発達心理学ハンドブック、福村出版、1998.3
- 2) 横瀬拓也：人間の生涯発達からみたまちづくり手法に関する研究、茨城大学修士学位論文、1996
- 3) ジョンコートル、石山鈴子訳：記憶は嘘をつく、講談社、1997
- 4) 池田朋子、大貝彰：言説を分析対象とした空間イメージ研究の手法に関する研究、日本建築学会計画系論文集第492号、pp149-156、1997.2月
- 5) 中村桂子：生命科学者ノート、岩波書店、2000.3
- 6) 東山魁夷：風景との対話、新潮社、1967